

山と博物館

第31巻 第2号

1986年2月25日

大町山岳博物館



春を待つ集落(大町市三日町)

前 景

インドの北方にダーズリンという美しい町がある。紅茶の生産地として一般的にはよく知られているし、登山に興味のある人なら、かのテンジン氏の住んでいる町としても有名である。そのダーズリンを宣伝するのに一つのうたい文句がある。

「ヒマラヤの展望台ダーズリン」である。

町の中心からオンボロジープをタクシー代りに40分程行くとタイガー・ヒルという所に着く。そこがカンチェン・ジュンガを見るに絶好の場所ということだ。私がおの丘を訪ねたのは、日の出を見るためであつて朝の早い時間であつたが、インド人に混つて東南アジアの人や欧米の観光客も大勢いた。とにもかくにも素晴らしい景色を堪能できる町である。

ヒマラヤの眺めならネパールのポカラがいと多くの人が言つたり書いたりしている。私もそう思うが、それより更にダーズリンがいいと、私は思う。理由は単純である。「ヒマラヤというバックの前に人の生活している景色があり、その前景の差が僅かではあるがダーズリンの方がバックのヒマラヤを引立たせている。」という訳である。

ひとが景色をどのように見ようがそれは勝手であるが、私のように「中・高年登山者」になると、どうしても前景にある人の生活が気に掛かつてしまう。

近年多くの日本人がネパールに出掛けます。ブータンも脚光をあびるようになりました。結構なことだと思ひますが、御存じのようにこれらの国は経済的には日本と比べればずいぶん差のある生活をしていきます。経済的にはそうであるかもしれないが、その人なりの生活がちゃんとあるのです。そこをきちんとわきまえてヒマラヤなりどこなり行くべきでしょう。あるとき私は、カトマンズの街中で十歳くらいの女の子に「ニッポンジンクルクルバー」と言われて、わびしく、悲しい気持ちにさせられたことがあります。

(長野県山岳総合センター勤務 柴田哲也)

名も無く貧しく美しく生きる。ただびとである事をお前も喜べ。しかし今私が森で拾うつた一枚のかけすの羽根、この思い羽の思いもかけぬ碧きこそ私たちにけさの秋の富ではないか。

この詩を引用して、六〇年八月二六日の朝日新聞・天声人語は森林保護を説いていた。

昭和二八年には、七年間の富士見生活に別れを告げ、東京・上野毛の生活に入っていた。六一歳の時である。

昭和三七年頃の秋、上野毛のお宅をお訪ねしたことがあった。武蔵野の面影がわずかに残る丘陵の中に、その小さなお宅があり、周囲は秋草の茂るに任せてあった。

聞けば野鳥が寄りつくように、自然に樹木や草を茂らせるのだということだった。奥さんの実子さんは、明治の作家・水野葉舟氏のご長女で、高村光太郎氏の仲介で尾崎家へ嫁いだとお聞きしたが、やさしさのなかに床しさを湛えた方で、野鳥のためにパン屑や水を用意しておられるお姿に心を打たれた。

蔵書に埋まった上野毛の書齋では信州時代の思い出話に花が咲き、先生は当時の人たちのしきりになつかしがられていた。

お宅を辞して帰る時、先生は無造作に下駄ばきのまま駅まで送ってくださいました。電車の窓に立つ私が見えなくなるまで、やさしいまなざしで見送られる先生の温かさは、胸にこみあげるものがあり今も忘れることはできません。

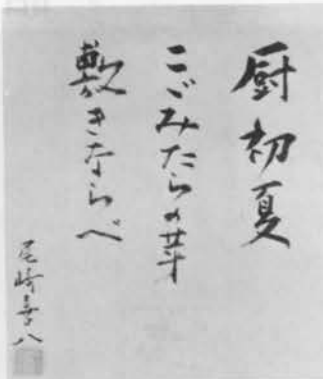
私の勤めた大町北高等学校の校歌は、先生の作詩によるものだが、まだお聴きになっておられないというので、お聴きいただくことを兼ねて講演をお願いした。朝、東京を発たれて、夕方近く信濃大町駅へお着きになった先生は、疲れた様子もなくお元気だった。雄

峯鹿島槍を近くでご覧いただこうということ、駅からそのまま黒沢高原へご案内することになった。たまたま高原にスキー場開発中の鹿島槍国際株式会社を案内したいという厚意によるジープで出発した。国道を北上し、木崎湖を過ぎる頃から山が迫り、紅葉が少しは遅かったけれど一段と美しく、眼をとめられる先生は感慨深げだった。中綱湖から沢沿いに坂道を登りきると、視界が開け高原に出た。鹿島槍の形のいい双耳峯が残照の空を区切つてきれいだった。車を降りられた先生は、じつと山を見つめておられたが、やがて愛用のベレー帽を手にかざして、久しぶりに会えたなつかしい人にもするよう山に向かつてそれを振られていた。山に対する敬虔な姿は神々しいほどであった。昭和三八年文化の日のごことである。

厨初夏

こごみたらすの芽
敷きならべ

北アルプス山麓の雪だけの谷間で摘んだ山菜を、上野毛の先生のお宅へお届けしたことがある。折返し、先生から二枚の葉書をいただいた。一枚には毛筆でこの句が、一枚には丁寧なお礼の言葉が書かれている。優しい深い愛情のつまった、昭和四一年五月七日の消印のある二枚の葉書は、私の大切なものの一つである。



筆者宅訪問の際
揮毫いただいた色紙

つである。一枚の葉書にはこう書かれている。

その後存じながらすつかり御無沙汰してりましたが、あなたも奥様も相変らず御健勝の御様子をお知らせの早稲田大学の二人のお嬢さんからの報告で知り、改めてお喜び申し上げます。

さてその月田、酒井両嬢にお持たせの山菜二種、御志と一緒にありがたく頂戴いたしました。いずれも新鮮で、お仰せのようにゴゴミはゴマ和えとひたしに、またタラの芽は薄ごころもの揚物にして賞味いたしました。妻も富士見時代を思い出してなつかしがり、御厚意に涙ぐみつつ料理をしたり、賞めながら食べたりしておりました。

両嬢は先生に連れられて美ヶ原に参った由、大喜びでいろいろ話してくれましたから、お使いの御礼と記念に、それぞれ一冊ずつ近刊の訳詩集を贈りました。(中略)

お誘い頂いた山菜摘みには残念ですが参上致せませんが、校長さんとのその小さい山旅が楽しくある事を祈ります。奥様にくれぐれも宜しく願ひ上げます。

間もなく鎌倉の明月谷へ移られた先生を一度だけお訪ねしたが、四九年二月四日、同じ鎌倉の病院において八二歳の生涯を静かに閉じられた。私の星が消えた。哀惜の限りである。

昨年四月八日、南安曇郡穂高中学校の玄関わきに、先生の作詩になる「田舎のモーツァルト」の詩碑建立の除幕式がおこなわれた。井ノ口高造校長、同窓生、交友のあった高橋達郎さんなどの尽力によるものである。この詩について「音楽への愛と感謝」にこう書かれている。

これはまた佳く晴れた秋の日の事だった。大町に住んでいる或る友人に誘われて安曇平穂高町附近の有名な山菜田を見物に行った帰



黒部ダム工事見学の尾崎先生(左端)
他は高校職員(講演の翌日)

り道、その友人の案内で或る中学校を参観した。(中略)私は折からのピアノの鳴っている音楽室というのに案内された。(中略)それは私もよく知っている：「トルコ行進曲」だった。

中学の音楽室でピアノが鳴っている。生徒たちは、男も女も、両手を膝に、目をすえて、

きらめくような、流れるような、音の造形に聴き入っている。

そとは秋晴れの安曇平、青い常念岳と黄ばんだアカシヤ。

自然にも形成と傾聴のあるこの田舎で新任の若い女の先生が孜孜としてモーツァルトのみごとなロンドを弾いている。

除幕式には、実子未亡人はじめご遺族の方々が参列し、私も案内者ということで招待者の幸せを持たせていただいた。

自然を愛し、文学を愛し、音楽を愛し、人を愛した人は今は亡い。いつかもう一度の山行を願つていたのに。私の知らない遠方で清らかに詩をうたいあげておられるだろう。清く、美しく生きられ、沢山の作品を残し、私にも慈しみの心をかけてくださった尾崎先生に精いっぱい感謝を捧げて筆を擱く。

(大町山岳博物館嘱託員)

ズク(根気)の縁語

北アルプス東麓の方言(2)

福沢武一

1 大学を卒業して長野市へ赴任した。今次の戦中のことである。南信生まれの私は北信方言にしばしば驚かされた。その一つは、

ズク(根気) 「我意を張る。」

ズク(根気) 「(以上、更級大岡) としない。」

ズク(根気) 「我意を張る。」下高井塚。不思議な言葉に思われた。これがズク(根気)に關係しようなどとは予想だもしなかつた。

ズクとズクナシ(意け者)は全県下で愛用されている。ズクには根気・氣力・やる氣・甲斐性などが当てられる。本義は何か?

ズク(精根) 「心付く」などのズクであらう。(上田附近方言集)

この説には納得がいかなかった。

同僚に小宮山老先生がいた。先生はズクの解明に一石を投じてくれた。

「ズクはツツ(術)のなまりだ。なるほど、と思う一方、なにか満たされな

その十年後、申信に移り住み、ここがズク

ネルの本場であることを知った。このほかに

次のものが併用されている。(分布図①参照)

ズク(根気) 「意地を張る、すねる。」

ズク(根気) 「鶏が卵をだいて巣から離れない。」

ズク(根気) 「(女)の卑称」

ズク(根気) 「すなおでない」ことを意味している。それはわかつたが、ズク(根気)に關係していようとは思わなかった。

昭和二十六年、東条操先生の全国方言辞典が出版された。以来、恩恵をこうむっている。そのズクの項は、(分布図②参照)

ズク(根気) 「根性・根気・元氣。」

ズク(根気) 「いくじなし。」

ズク(根気) 「不精者、以上。」

ズク(根気) 「不器用者。山形・新潟」

右のズク(根気)は、前記のツツ(術)説を支持するには微力すぎた。ズク(根気)に必要なのは、行動に立ち向かわせる動力のようなものだ。

3 今から五年前のこと、当時生まれかけていた上伊那方言の自著に「ずくなし」と題した。にわかにズクナシの本義を明確にしなければ

ならなくなった。ズク、骨惜しみしない。精を出す。イタヅク(傷就)の上略か。或はツツ(術)の転か。(岩波泰明氏「諏訪の方言」) イタヅクは「苦勞する、疲れる」の意の古語だ。ここには当たりそうにない。

柳田国男先生は、ズクは骨のことであると述べておられたことを記憶している。ズクは身体を支える軸となっている骨格のことである。そこで「ズクがある」はその人の精神的な骨格が確立しており、精を出して働く性根を持っていることである。(「下水内の方言」)

この思弁にはとても従えなかった。ズク(根気) 「根性・根性・元氣。」

ズク(根気) 「小学館「日本国語大辞典」(小学館「日本国語大辞典」)

ズク(根気) 「物事を出しきること。これとズク(根気)とはつながらない。ついに承服できるものは一つもなかった。

途方に暮れる時、改めて思い及んだ。ズク(根気)とズク(根気)が同根であるということ。

ズク(根気)とズク(根気)は、すねたり意地を張ったりする。それにはそれなりの理由があるはずだ。ズク(根気)にしても、女の言い分を聞いてやらないで、男の勝手できめつける方が間違っている。(と申す私はフェミニニ

ストではありませぬ。) 鶏にしても、卵をかえすために命がけなのだ。意地の強さは見上げたものだ。ズクのすさまじさに初めて目が覚めた。

この私見を勇気づけてくれるものがある。ズクの縁語の界外の分布だ。(分布図②参照)

ズク(根気) 「むずかる。」

ズク(根気) 「鶏が卵をかえすために巢につく。」

ズク(根気) 「(以下、日本国語大辞典) 口豊浦」

ズク(根気) 「(以下、日本国語大辞典) 悪ふざけする。」

ズク(根気) 「ズクが同根であることは疑う



分布図②

余地がない。本議は「根性」といったものである。それがとかく悪い方にとられ、しつこい・むずかる・すねる、さては悪ふざけする・怠る等々の諸義を派生した。ズク(根気) 「怒る。」

ズク(根気) 「むずかる。」

ズク(根気) 「ばれる。」

これらもズク(根気)と別系ではない。山口のズク(根気)、熊本のズク(根気)の存在も偶然ではない。日本語の古い年代に、中央から東西の果てまで流伝していった名残りが方言である。ズクにはスサノヲの尊の風ボウを連想させられる。ただけしかなかっただけに、善悪両様の語義を帯びている。

(上田女子短大教授)



分布図①

- 0 糸魚川
- 1 北安曇
- 2 大町
- 3 豊科
- 4 奈川
- 5 日向
- 6 松本
- 7 塩尻
- 8 上伊那
- 9 辰野
- 10 伊那
- 11 福島

調査地点
符号は本文中のもの

山と博物館第31巻第2号

発行所 長野県大町市 TEL 222-0111
印刷所 大町市山岳博物館
定価 年額一、二〇〇円(送料共)切手不可
郵便振替口座番号(長野四一三三三三三)